

## 「A J A 推奨レイアウト用紙規格」(解説)

現在、アニメーション制作の現場において、各社が使用しているHD対応(比率16:9)のレイアウト用紙の規格はまちまちであり、ほとんど統一性がありません。

そこで日本動画協会では、各制作現場における業務の効率化を図ることを目的とし、アニメーション制作用レイアウト用紙の推奨規格として、「A J A 推奨レイアウト用紙規格」(以下、「A J A 規格」)を制定いたしました。

### 規格制定の目的

レイアウト用紙の推奨規格を制定することにより、各制作現場において以下のような業務の効率化が図れると考えられます。

- ① 複数の会社の作品を受注する現場において、レイアウトが統一されることにより、作業の効率化やミスの軽減が期待できる。
  - ・ 演出・作画の作業において、レイアウトの違いによる違和感が解消できる。
  - ・ 仕上・撮影において、スキャンフレーム・撮影フレームなどの統一を図ることが出来るため、作業効率のUPや設定ミスを軽減できる。
  - ・ 誤って他社のフレームを用いて作業してしまった場合のリスクが軽減できる。
  - ・ 関係各社との意思疎通の簡易化が図れる。
- ② 規格を統一することにより、レイアウト用紙の発注に要する労力や単価・納期を抑えることが期待できる。
- ③ 新規にレイアウト用紙を導入する会社にとって目安となることが期待できる。
  - ・ 独自に情報を収集して新規規格を制定する場合に比較して、労力・コストが軽減できる。
  - ・ 「A J A 規格」を採用しない場合であっても、規格制定の根拠が公表されていれば、有益な情報として活用できる。

### 規格内容の解説

#### 1. レイアウト用紙のサイズは、A4(297mm×210mm)とする。

アンケートの結果、各社が採用しているレイアウト用紙の内、もっとも普及している用紙サイズがA4であることがわかっています。これは、A4サイズの内紙がアニメーション制作に限らず一般に普及しており、印刷や複写の際に便利である他、生産コストを抑えることが出来るためと考えられています。

#### 2. メインフレームのサイズは、10インチ×5.625インチ(254mm×142.875mm)とする。

メインフレームの横幅を10インチとした場合、ソフトウェア上や印刷時における解像度計算が容易になるなどのメリットがあります。日常的に使用頻度の高いセンチ単位にしてはどうかとの意見もありましたが、インチ単位を指示する意見が多数を占めました。

また、フレーム外の余白(マージン)については、以下の二点を考慮しました。

- ① 作画・カメラワーク用のマージンとして、フレームサイズの110%の余白が必要である。
- ② 紙の破損に対処するマージンとして、「①」の外側にさらに数%の余白が必要である。

3. メインフレームはタップ穴に対して平行とし、メインフレームの中心から中央のタップ穴の中心までの距離は、4. 125インチ（104.775mm）とする。メインフレームの中心及び中央のタップ穴の中心は、レイアウト用紙の中心を通る垂直線上に位置するものとする。

タップからメインフレームの上端までの距離については、作画・スキャン時にタップが邪魔にならないように十分な距離をとる必要がありました。

また、メインフレームの下端から用紙の下端までの距離については、狭すぎると作画時に障害となり、広すぎると動画チェック時（紙をパラパラめくる時）に障害となることがわかりました。

現場の意見を聞いてバランスの良い距離を検討した結果、4. 125インチになりました。

4. レイアウト用紙の上端からタップ穴の中心までの距離は、10mm～12mm程度の範囲で使用者が自由に決めることが出来る。

用紙の上端からタップ穴の中心までの距離は、各制作会社や印刷会社などによって必ずしも統一されていないことがわかりました。

これについては、「AJA規格」において厳密に定めるべきではないと判断しました。

5. 参考規格として以下の4種類の補助線を制定する。これらの補助線を採用するか否かは、使用者が自由に決めることが出来る。また、この4種類以外の補助線が必要な場合は、使用者が自由に入れることが出来る。

① センタークロス

メインフレームの中央（対角線が交差する位置）を示す十字マーク。

② 四辺の二分割ライン

メインフレームの四辺の中央を示すライン。

③ 安全フレーム

受信機の表示範囲にバラつきがあっても、見切れることが無い範囲の目安。

メインフレームに対して、縦横90%の領域。

④ スキャンフレーム

作画及び仕上を行う範囲の目安。

メインフレームに対して縦横110%の領域。

補助線については、使用者が自由に定めるべきであると判断して参考規格に留めることにし、使用頻度が高いと思われる4種類の補助線について制定しました。

③の「安全フレーム」については、NHKでは「有効走査に対する縦93.1%、横93%の範囲を放送画面の情報範囲と定義」（※）していますが、「AJA規格」では縦横共に90%としました。これは、縦横の比率を統一し、きりの良いサイズにした方が、利便性がより高いと判断したためです。

④の「スキャンフレーム」については、制作現場の意見により、作画やカメラワークのマージンとして、最低110%が必要であると判断しました。

（※）「映画テレビ技術手帳 2007/2008年版」（社団法人日本映画テレビ技術協会発行）より

6. メインフレーム・補助線に使用するラインの色・太さ・形状（実線・破線）等は、使用者が自由に決めることが出来る。なお、補助線は細線や破線等を用いて、メインフレームと明確に区別できるようにすることを推奨する。

補助線の色・太さ・形状については、使用者が自由に決めるべきであると判断し、「AJA規格」では明示しないことにしました。

7. レイアウト用紙の空欄には、社名等のロゴ、尺・シーン・カットNOの記入欄等の付帯情報を、使用者が自由に入れることが出来る。

付帯情報についても、使用者が自由に決めるべきであると判断し、「AJA規格」では明示しないことにしました。

8. この規格を採用したレイアウト用紙には、「AJA Fr01」の表記を入れるようにする。表記の位置・大きさ・字体・色等は使用者が自由に決めることが出来る。

「AJA規格」制定の目的の一つに以下の項目があります。

① 複数の会社の作品を受注する現場において、レイアウトが統一されることにより、作業の効率化やミスの軽減が期待できる。

この目的を達成するためには、現在使用しているレイアウト用紙が「AJA規格」に沿ったものであるかどうか、容易に判断できる必要があります。

そのため、「AJA規格」の採用を明示する表記を入れることが必要であると判断しました。